



1984年11月5日

No. 27



特集：世界にはばたけ総科生!!

目 次

1. 特集 世界にはばたけ総科生//		編 集 部	
1) 海外からの手紙			
「花咲けるフランスの庭にて, エトランゼとなりて」		藤 本 桂 子	1
「サウジと日本とフィリピン」		土 井 敏 邦	3
2) 海外体験記			
「イギリス体験・日曜はだめよ」		辻 岡 弘 子	6
「原色の子供たち」		桐 木 淳 二	7
3) 海外と私			
「日本を離れ夢を抱く」	自然環境研究講座教授	根 平 邦 人	9
「異文化の文法コードを求めて」	英米研究講座助教授	米 田 巖	10
4) 目で見える“世界にはばたけ”			11
5) 留学生に会って			14
6) 『飛翔』留学講座			16
2. 『飛翔』に見る総合科学部			
『飛翔』10周年を迎えて	編 集 部		
1) 『飛翔』創刊のころ	比較文化研究講座助教授	水 島 裕 雅	18
2) 私の総合科学部観		岡 本 光 治	20
3) しかし, しかし……なのだ			
～『特集』の特集～	編 集 部		20
3. 昭和59年度教育実習レポート			
教育実習雑感	教 職 委 員 会	上 垣 内 孝 彦	23
教育実習 — 雑感	環境科学研究科	宮 城 島 浩 之	23
国語教育実習を終えて	地域文化コース	浜 岡 多 佳 子	24
不真面目なまでに真面目な優等生とともに	社会文化コース	橋 本 記 一	25
4. 青春19 — エキゾチック Daisen —	環境科学コース	井 上 智 博	27
5. シリーズ「数字」その3	編 集 部		28
6. シリーズ「知られざる総科」その1			
健康相談室インタビュー	編 集 部		29
7. 追 悼			
邪気のない人 — 三木先生のご逝去を悼んで	フランス語講座教授	内 藤 陽 哉	30
三寺光雄先生を偲んで	自然環境研究講座助手	中 根 周 歩	30
故湯崎稔教授を追悼して	社会文化研究講座教授	芝 田 進 午	32

1. 特集 世界にはばたけ総科生!!

編集部

世界にはばたけ総科生。このフレーズは総科生なら誰しも一度は聞いたことがあるはず。『安芸の国』の歌詞で、総合科学部生の理想像でもあるのです。しかし、そうは言っても現状はどうでしょうか。ただのフレーズのみに止まっているのではないのでしょうか。『飛翔』編集部では、突然舞い込んで来たフランスからの手紙をきっかけに、果たして総科生は世界にはばたいているのかという問題に取り組むことになりました。総科10年間に多くの先輩方が世界へと行かれました。その方々の協力を得て、総科と海外の関係を明らかにすべく、その実態を調査したわけです。そして、この特集が世界にはばたく総科生となるための第一歩になればと思っています。

1) 海外からの手紙

「花咲けるフランスの庭にて、エトランゼとなりて」

地域文化コース 藤本 桂子

異国でめくったカレンダーも、はや6枚目を数える。戦場に赴く兵士の心境で、ドゴール空港に降り立った夏の日には、もはや遠い。道ゆく人々の好奇に満ちた視線にも、2時間もある昼休みに、店という店が扉を閉ざす閑散とした日曜の風景にも、すっかり慣れてしまった。ロワールの流れのごとく、ゆったりとした大陸のリズムは、いつしか私をも組み込んで行く。

ここツールは、パリから列車で南西に約2時間、トゥレーヌ地方の中心都市である。国内では最長を誇るロワール河と、その支流が、温暖な気候と豊かな土地をもたらすこの地方は、古くから「フランスの庭」と呼ばれてきた。なだらかな丘陵や、森の間に、数多くの城が散在し、かけ足の観光客にとっては、パリから気軽に足をのばせる観光地として名高い。戦後、街全体は近代都市として生まれかわったが、私の住む一角は「古いツール」とよばれ、中世の面影を残す家並が続いている。

私が席を置いているツール大学の外国人用講座は定評があり、各国からの学生を魅きつけている。日本人も結構多く、日本語を忘れる心配はなさそうだ。クラスには、アメリカ、イギリス、ドイツ、ベルギー、スイス、イタリア、タイ、台湾などの学生達がいる。日本人は、私を含めて3人だ。

外国人の間に身を置いて初めて、自分がまぎれもなく日本人であり、良くも悪くも日本人の特性を備えていることに気づいた。たとえば、こういうことがあった。先生から、クラスの人数が多すぎるので

2、3人下のクラスに降りてほしいという話があった。クラス替えがあっても間もないところで、テストらしいテストもなかったし、先生も各自の実力を知るよしもなかった。そこで、まっ先に標的にされたのが、私達日本人である。というのは、授業中の発言が、私達は圧倒的に少なかったからである。他国の学生達は、知っていることはもちろんのこと、知らなければ質問の形として、積極的に発言する。めったに手など上げない。早いもの勝ちである。授業中あてられもしないのに、発言するのは、我々日本人の辞書にはない。質問するときも、なるべく時間を使わないように気を使う。ところが、文法のテストなどがあると、きまってよくできるのは日本人なのである。私達は、あわてて先生に抗議に行った。「私達は、授業中、発言することに慣れていないけど、文法はわかっているから、前のクラスはもう繰り返したくない。」と。すると、先生は、驚いて言った。「まあ、あなた達は、うまく話せるじゃないの。私達は、あなた達がそんなに話せるとは知らなかったわ。そうやって、授業に参加してくれるのなら、私はあなた達を落としたりしません。」この国では、授業を黙って、熱心にきいているだけでは、授業に参加していることにならないのだ。それからというもの、まだまだ不十分ではあるが、私達は授業中、努めて発言するようにしている。日本人が、国際的に進出する場合の、一つの壁を感じた思いである。

フランス人の個人主義というのは、今ではよく耳にすることである。個人主義というと、いかにも孤

独を克服し、単独で行動する人々を想像するが、事実はそうではない。フランスは、男女一組で行動することを義務づけられているかのような社会である。夫婦はもとより、恋人達もそうである。テレビなどでパリの風景を見かけた方は、おわかりだろう。この国では、個人主義が徹底しているかわりに、家族間、夫婦間、恋人同士のように、心を許し合った間柄では、日本以上に密着しているのではないだろうか。人間にとって一番の基盤となる結びつきを大切にし、それらをひとつかたまりの「個人」とした上でフランスの個人主義は成り立っているのではないだろうか。だからこそ、他の「個人」のプライバシーも大切にす。日本人は、集団行動が好きなわりには、家族で、あるいは夫婦で共に行動することは少ない。

もちろん、家族間、夫婦間でも個人主義の片鱗はみられる。それははじめがはっきりしていることだ。食事の時には皆が顔をそろえて話題が絶えないが、その他の時間はめいめい好きなことをしている。日本の家庭では、一日中、多かれ少なかれお互いが干渉し合っているような気がする。そのくせ食事の時は、テレビがもっぱら話題の提供者となり、真の対話はない。これらは生活様式の違いであり、一概にどちらが良いとは言えないが、今後、私が家庭を作っていく際には参考にしようと思っている。

経済大国日本も、ここ西洋のただなかでは、極東の島国にすぎないことを思い知らされることがある。日本と中国と韓国とは、同じ言葉を使っているのかときかれる。チャイナ服を見て、「これは中国の服だ。」と言うと、どうして日本と中国の服の区別がつくのかと不思議がられる。我々にとっては、例えばスカンジナビア半島の北欧3国が、同じように思われるように、フランス人にとっては、これら3国はひとつかたまりに映るのである。異国情緒を売り物にする店では、しばしば日本と中国をかけ合わせて、さらにどこかゆがめたような絵などに会うことがある。漢字らしきものが書かれてあるが、棒が1本足りなかったり、どこかがひっくり返っていたりする。こちらの人にとっては、漢字も一種の絵柄にすぎず、間違っていようとかまわないだろうが、誤って伝えられている母国の姿を目の前にして、私はやはり心が落ち着かない。「これは、真の日本の姿ではないのよ。」と思わずさげびたくなる。しかし、考えてみれば、日本にはフランスまがいのものが氾濫しているのではないか。在日中のフランス人がそれら

を目にしたとき、同じような憤慨を感じることだろう。真実に自らの目で触れることは大切だ。

その意味でも、皆さんのうち一人でも多くの人が海を渡る機会を得てほしいと思う。島国に育った私達にとって、母国を外から眺めることは必要だ。今まで私は、自分の生きてきた世界 — そこでは人々は一様に黒い髪をし、同じ言葉を話して、以心伝心でわかり合ってきたのだが — の他に、別の世界が存在することを、実感することはなかった。だが、これからは帰国してからも、この地球上には、いろいろな社会が存在し、さまざまな人々がいきづいていることを忘れないだろう。自分達の生きている社会だけが、世界ではないのだ。そう実感する人間が増えることが、自国の私利私欲のみに走らない広い視野を持つ考え方の土台となるだろう。

総合科学部の役割は、年々重大になってくると確信する。従来のような狭いものの見方では、動かしきれない世界が来るに違いない。私達は、いろいろなことに興味を持たされてきた。(残念ながら、私には、こういう受身的な表現しか使えない。)そしてその気になれば、もっと貪欲に、いろいろなことを学べたはずである。しかし、現状では、私も含め多くの人が、自分の専門すら満足に研究できず、その他の分野となると手に負えないのが正直なところだろう。それならば、せめていろいろな分野に、土台を作っておいてもらいたい。必要なときに、必要な知識をいつでもその上に積み重ねることができるように。はるかなる異国より、皆さんの、そして特に卒業して行く皆さんのご活躍を祈りつつ、次の言葉を送りたい。



Puisqu'on ne peut être universel

et savoir tout ce qu'on peut savoir sur tout,

il faut savoir un peu de tout.

Car il est bien plus beau de savoir quelque chose

de tout que de savoir tout d'une chose.

— Pascal

「サウジと日本とフィリピン」

56年度卒社会文化コース 土井 敏邦

1. 家族の“重さ”

この夏、サウジアラビアからフィリピンへ飛んだ。サウジで働くフィリピン人出稼ぎ労働たちの家族を訪ね歩くためである。

日本では意外と知られていないが、サウジは外国人出稼ぎ労働者の国でもある。砂糖に蟻が群がるように、オイルダラーめあてに数多くの先進諸国の企業がサウジに「進出」している。企業が最大限の利潤をあげるには、「いつでも使い捨てできる安い労働力」が不可欠となる。企業はそれをいわゆる「第三世界」からかき集めてくる。サウジの町々は、その「第三世界」の労働者であふれていた。油田地帯として有名な東部地域では住民の七割が非サウジ人だといわれている。フィリピン人、インド・パキスタン人、韓国人、イエメン人などその国籍もさまざまだ。

だが、その外国人にとって、サウジでの生活は想像以上に厳しい。厳格なイスラムの戒律によって酒は御法度、単身の外国人が女性と言葉を交わす機会は、まずない。町に出ても娯楽施設一つあるわけでもない。せいぜい買物か店頭を見て歩くぐらいだ。報道管制も厳しい。サウジに都合の悪い記事の載った海外雑誌の記事はマジックでぬりつぶされるか、引きさかされている。秘密警察や宗教警察の目は、町のどこにでも光っている。外国人による国内への影響を最少限に食い止めるために事実上の隔離政策がしかれ、外国人がサウジ人と深く交わる機会もほとんどない。牢獄にでも軟禁されたようなこの環境のなかで外国人労働者たちは、「働いて食べて寝るだけの生活」を淡々と繰り返す。「働く」といっても、

建設現場では、夏は気温が50度を越す炎天下での仕事である。それでも、彼らの基本給は平均300ドル（約7万円）前後。日に2、3時間の残業を入れてやっと500ドルにとどく（建設現場の日本人の場合平均2,000ドル強といわれる）。

出稼ぎ労働者のなかには、もう数年サウジで働いている者も少なくない。妻子のいる既婚者が多い。家族と離れて、しかもこの厳しい環境のなかで、どうして彼らは長年耐えられるのか。私にはそれが不思議でならなかった。私の周囲で働くフィリピン人たちに、サウジへ渡ってきた経緯を尋ねまわることになったのは、そんな疑問からだった。彼らは口を揃えたように、その動機を「家族の将来のために」と言い、「そのために自分を犠牲にするのだ」と答える。サウジで働いて4年目、1児の父親である27歳の青年はこう語った。「毎日、ホームシックとの葛藤ですよ。帰りたくて眠れない時もあります。しかし、その時自分にこう言いかけます。『今日の自分のことを思うな。明日の家族のことを考える』とね。」

サウジでの生活のつらさを身をもって知るが故に、そんな話を聞かされた時に、そこまでして守るべき「家族」とは何か、という別の疑問がわいてくる。私はどうしても彼らの家族に会ってみたいとなった。

このフィリピン人出稼ぎ労働者とその家族の実態について、ここで詳しく報告する紙面はないが、近日中にルポタージュとしてまとめるつもりでいる。この取材と平行して、私は、日本人とは切り離せないもう一つの問題を追った。「ジャパゆきさん」や



2年3カ月ぶりにサウジから帰った夫(35才)とその妻。2児がいる。一月後、夫は再び、サウジへ向かった。

マニラで日本人観光客を相手に春をひさぐ女性たちである。フィリピン人の知人たちを通じ、「ジャバゆき」を経験したヌード・ダンサーや、「ホスピタリティー・ガール」と呼ばれる女性たち数人に会って話をきいた。そこでもまた、私は、彼女らをとりまく家族の“重さ”をまざまざと見せつけられることになった。

日本人を相手に春を売るエマ(仮名)は22歳、ある地方都市の出身である。父親はタクシーの運転手で収入は月に2,000ペソ前後(約100ドル)。長女のエマの下に、現在大学へ通う2人の妹と、高校生の二人の弟、それに小学生の末弟がいる。一旦大学に入ったエマは、学費が続かなくて1年で退学、父親の収入だけでは養えない家族を助けるためにマニラへ出た。最初は美容院に勤めた。日給が10ペソにも満たない日もある薄給だった。家族への送金などできようはずもない。彼女は送金する金をつくらねばならなかった。大卒でもない女性がマニラで高収入を得る方法は限られている。エマは今の“仕事”に身を投げ出した。20歳の時だった。稼いだ全収入から自分の生活費を引いた残りは全て家族へ送る。その金で妹たちは大学へ進学できた。マニラでウェイトレスをやっているというエマの話信じきっている父親は、毎週、送金催足の電報をよこしてくる。「結婚は？」ときくと、「こんな“仕事”をしてい

ては、同じフィリピン人と結婚なんかできないでしょうね。」と沈み込む。「でも、妹たちを卒業させてしまったら、私、もう一度、大学へもどろうと思います。将来、銀行で働きたいんです。」

2. からみあう三国

家族とは何か、と自問しながらやって来たフィリピンで、私が目のあたりにしたのは、その家族に重くのしかかる「貧困」の影だった。この「貧困」の背景を追求すれば、畢竟、「北」の豊かさと「南」の貧しさが同時進行していく世界経済の仕組みにまで言及しなくてはならなくなる。が、それはもう、私の能力を越えている。ただ、サウジそしてフィリピンへと渡って、私は一つ新しい発見をした。

学生時代、イスラエルで暮らしたことがきっかけで、以来、中東問題と関わってきた私は、中東と日本を1本の直線で結ぶことにこだわってきたが、事はそう単純ではなかった。中東と日本を結ぶ線は、「第三世界」という別の糸と複雑にからみあっていたのである。例えば — 中東に「進出」した日本企業に「安い労働力」としてかき集められた人々は、その働いて得た金で、中東の街の店頭にあふれる電気製品やカメラ、時計などの日本製品を買いあさる(これら日本製品の、サウジにおける最大の顧客は、彼ら出稼ぎ労働者たちだと言われている)。一方中東で働く日本人たちは、抑えつけられた性欲の吐け口を求めてマニラやバンコクに殺到する。また一方、日本政府は、フィリピンに「進出」した日本企業の利権を守り、新たな「進出」の基盤を作るために、「経済援助」によってその独裁政権を支えようとする。腐敗した政権の延命によって、国内経済はますます悪化し、人々は家族を支え、生き延びるた



デモを阻止しようとする警官隊をなじる沿道の子どもたち

めに中東へ出稼ぎに行き、「ジャパゆきさん」となり、札束を切って押しかける日本人に春を売る。他方、独裁政権は、海外で働くフィリピン人たちに、その給与の7割以上を銀行送金することを法によって義務づけ、延命のための外貨獲得に躍起になる……。

アキノ暗殺1周年を間近に控えたマニラでは、連日、反マルコスのデモが繰り返られていた。8月17日、マカティ地区からマニラ市街へ向かう主幹道路を埋めつくした数万人の学生や労働者たちのデモの中を、私は、日本の役割について意見を尋ねてまわった。デモのリーダーの一人は、こう答えた。「日本の経済援助は、一般民衆の利益にはならず、マルコスを助ける結果になっています。今の経済困

難を解決するためにも、この国をまず民主化しなければなりません。私たちが反対し闘っているその独裁を支えようとするのは一種の内政干渉です。

私たちは日本のジャーナリストたちに、ナカソネやマルコスの視点ではなく、このように街頭で闘っている民衆の視点を、日本の民衆に知らせてほしいのです。それによって、日本の大衆は、世論の力でナカソネに、独裁政権への援助をやめるよう圧力をかけられるはずで。私たちが望むのは、そんな民衆間の協力と団結です。」

翌日、私はマニラ空港からサウジへ向かった。空港では、サウジへ向かう出稼ぎ労働者たちが長蛇の列をつくっていた。



8月17日、数万人のデモの先頭に立つ、故アキノ氏の実弟、ブツ・アキノ氏(中央)

2) 海外体験記

「イギリス体験・日曜はだめよ」

地域文化コース 辻岡 弘子

イギリスでの体験について書いてほしいと言われた。話しだしたらきりのない私ではあるが、よく考えれば参考になるようなことは何もない気がする。参考などともったいぶることもないので、雑談の延長にしてしまおう。

2月28日、ロンドン・ヒューズロー空港は曇空だった。ちょっとしたアクシデントで2日遅れ、疲れで激しい頭痛に苦しめられたが、現金なものでロンドンが見えたとなん、ふっとんでしまった。目にするものすべて新鮮でやたらと古くさかった。矛盾するようであるが事実である。あのような歴史的な建物が近代都市の一部、いや全体を覆っているのが目新しかったのだ。やたらと鋭く澄んだ冬の空気が興奮した私には快かった。

ロンドンから南へ汽車で2時間、ヘースティングスの町は、ノルマン・コンクwestの古戦場だ。今は保養地として休日に賑わいをみせるが、普段はひっそりとした小さな町だ。私はそこで約12週間すごした。朝から夕方にかけては英語学校に通い、学校の後は、夕食までの数時間を海岸ですごしたり、街をぶらついたり、城に上がった。夕食後はたまに学校で催されるレクリエーションに参加したり、ホストファミリーとテレビを見たりしていた。夜9時、テレビのくぎりの時がティータイム。ティータイムといえば、朝食のあと学校へ行く前の10時ごろにも、いつもリビングで本を読む私にティーとお菓子をもってきてくれたものだ。



ロンドン塔から見たタワーブリッジ(ロンドン)

学校は金曜までで、土曜にはいつもエクスカージョンが計画されていた。それに参加してカンタベリーやブライトンに行ったが、私はほとんどの週末はロンドンに日帰りで遊びに行った。第一歩を踏んだ時、大きな興奮ととまどいとショックを与えたロンドンの街もしだいに私の足になじんでいった。方向オンチの私でも、一人で地図を頼りに歩きまわろう



冬の衛兵交替(バッキンガム宮殿・ロンドン)
あの赤い制服の上に防寒用コートを着ている。

ちになんとかなるような気がしたから不思議なものだ。とにかくやたらと歩きまわって、いつもくたくたになって列車に揺られていた。私の靴はおかげでヨレヨレ、泥だらけで、ミセス・レベルはいつかヒロコの靴を磨かなければといつも言ってたっけ。結局あの靴もイギリスに置いてきてしまった。

ところで、なぜ土曜日に旅行をするのかというと、まさに、“日曜日はダメよ”である。まず交通機関の数が少なくなる。お店はちょっとしたフードショップが開いてるぐらいでほとんど閉まっている。私の友達で日曜日にロンドンへ行き、夕方6時に出て、車が遅れたり乗り換えさせられたり、夜中すぎにやっと帰れたという悲惨な人がいたぐらいだ。日曜日は安息日で、教会へ行かなくとも(実際、ホストファミリーの誰も行っていなかった。)家でゆっくり家族と休む日のようだ。近くの公園に散歩に行くぐらい。天気の良い日の公園は日光浴客で一杯。こういうところで緯度の高さを感じた。こんなのんびりした彼らイギリス人の優雅さがうらやましくなる。

日本人の私にはひたりにきれない部分だったようだ。

天気といえば、イギリスは予想以上に寒く、冬が長かった。それにぱっと晴れるということが少ない。ヘースティングスの水平線はいつも空と海の鉛色でおしつぶされていた。4月末イースターの頃に一時期暖かくなって冬用のものを送り返したのがまちがいであった。まさか5月中頃でもマフラーと手袋をするはめになろうとは……。

一人旅で不安や失敗、困ったことや迷惑したことなどもたくさんあったが、そのたびに人に助けられ

親切に触れ、何よりもそれが一番心に残っている。イギリスでの失敗談や言葉の不自由さのエピソード、イギリスが思ったよりも安全な国ではなかったこと、(例えば、リビアとの事件、今も血なまぐさいアイルランド問題、10週間以上も続いていたストライキ等)英語習得の難しさなど書くことは多くあるが、何よりも人のやさしさを実感できたのが収穫だったように思う。自分では自分の写真1枚もとれないのだから。機会があれば、またイギリスに帰りたいと思わずにはいられない私である。

「原色の子供たち」

社会文化コース 桐木 淳二

ナベやバケツをかかえたサリー姿の女たちが門の前に並んでいる。正面の大きな鉄の扉は閉ざされたまま。横の勝手口から一人ずつ、中に入っていく。近くにいるジュース売りのおっさんに聞いた。「マザーテレサズ・ホーム？」英語なんて簡単な方がいい。おっさんは小首をかしげる。インドで小首をかしげることは「イエス」を意味する。どうやらこらしい。カルカッタにある、「マザーテレサの家」だ。

藤原新也の『東京漂流』に、野犬が人の死体を食べている写真があった。「ニンゲンは犬に食われるほど自由だ。」という言葉は衝撃的であった。現在の日本で遠ざけられ、あまり見る事のない「死」を見つめてみたい。それがインドにやってきた動機である。カルカッタにいる間、いつかテレビで見た、マザーテレサの「死を待つ人々の家」を見てみたいと思っていた。しかし、その“見てみたい”にどうしても、うしろめたさを拭いきれないでいた。日本人特有の、のぞき趣味そのものではないか。

ところが昨日、偶然に出会った高山という男と話しているうち、「オレも行きたいと思ってたんだ。」という言葉聞いてふんざりがついた。賛同者の存在は、それが善いことであろうと悪いことであろうと、勇気を与えてくれる。

二人してようやく勝手口に入りこんだ。キョロキョロあたりを見廻していると一人のシスターが話しかけてくる。偽善を隠蔽するほどの英語力は持ち合わせていない。「アイ・ウォンツァ・ルック。」いやただ見物に来たわけじゃありません。その……と日本語ですらうまく説明できないことが英語でできるわけがない。未熟さは本音をさらけ出してしまふ。

シスターは何をか了解したようで、右隣りの建物の2階を案内してくれた。

2階に上がると、4、5人の子供がじゃれついてくる。きちんとした、淡いピンク色のワンピースや水色のシャツを着た子供たちだ。まわりを見渡すと乳児用ベッドが並び、さながら保育園のようだ。次に案内された礼拝堂を見て、ようやくここに私たちの望んでいたものがないことがわかってきた。子供しかいない、言ってみれば孤児院のようなものらしい。(帰国して本で調べてみると、どうやらここは、「マザーテレサの家」と呼ばれている所ではあるが「死を待つ人々の家」ではなく、慈善修道女会の「子供の家」らしい。)しかし、2人は子供たちの接待で忙しかった。「高い高い」と両手をつかんで持ち上げ、高山が子供たちとじゃれ合う。私が遊戯中の子供たちのスケッチをしていると、それを気にいったボランティアの女の人がみんなに見せびらかす。「ナマステ」(こんにちは、さようなら等、何でも使える挨拶言葉)と、子供たちの合掌に送られて部屋を出ていった。2人はそれなりに満足し、案内してくれたシスターに礼を言う。「サンキューベリマッチ、ウィハブアググタイム」2人で考えたお礼の言葉だった。稚拙な英語に恥じながらも、言いようのない満足感に満たされた2人は元気に出ていった。

高山と別れ、別の日本人とベナレスという駅に着いた。一人の女の子が寄ってくる。薄よごれた服を着て、手を差し出す。「ハロージャパニ、ワンルピー。」バクシーン(施し)を要求しているのだ。駅前で生活している路上生活者の子供だ。インドの乞食は堂々とバクシーンを要求する。富める者が貧する者に金を与えるのは当然の義務だからだ。与え

でも礼など言わない。と、知りつつも、ポケットに手を入れ、小銭を探った。するとどうだろう。どこにいたのかわからないが、「ハロー、ハロー。」と10数人の子供たちが急に巻き、細い腕が10本、20本と伸びてきた。我先に私の手から小銭をつかみとろうとする。10パイサコイン（1ルピー＝100パイサ＝約22円）はころがり落ち、そこに黒い群れができる。「この日本人は金をくれる！」黒いかたまりは私に向かってきた。私は嫌悪感とともに恐怖を感じた。近くにいたリクシャー（人力車のようなタクシーがわりの乗り物）に飛び乗りその場を逃げた。

駅に切符の予約に行く。外国人専用窓口で順番を待っていると、腰のあたりをトントンとつかれる。後ろを向くと、汚れたシャツを1枚着た少年が、うつろな眼をして手を出している。「やばい。」まわりを見渡すと、子供たちの姿が見える。彼らが臨戦体制をしいているように感じる。私は生理的に嫌悪し、無視して窓口に肘をついた。トントン、背すじがビクッとする冷たい打診が続く。2度、3度と返事のない腰に容赦なく打ち続ける。自己弁護はしない。私は振り向きざま、「NO！」と精一杯の拒絶をした。その時、見た少年の眼。何も楽しみはないのだろうか。反応のないものにはすぐに飽きてしまう子供の浮気心は存在しないのか。黒い顔に私を見せる白い眼があった。私はもう振り向こうとしなかった。いやだ、お前に金をやるつもりはない。あっちへ行ってくれ。

後ろを向けないという制約に数分間耐えていた。その時、マザーテレサの子供たちを思い出した。どうしてオレの態度は違うんだ？同じ子供じゃないか。あの時、彼らの手を握り、微笑みかけたではないか。同じ人間なんだぞ、どこが違う。テレサの子たちは笑いかけてくれた。礼儀があった……それから……。どれも違わない。ただ教育という衣をかぶせただけじゃないか。オレは何に満足したんだろう。考えてみればテレサの子の方が特別なのだ。たいていの子供はボロをまとい、裸足で生活している。オレは日本の考えに固執し、他のものは拒絶しているだけじゃないか。後ろを振り向いた。その子はいなかった。

子供たちにどう対していいのかわからない。街は貧しい子供たちでいっぱい。一人一人頼りずるわけにもいかない。などと考えながら、駅のホームでデリー行き列車を捜していた。インドの場合、寝台車を予約すると自分の名前がその予約した車両

に貼りだされる。それを捜していたが、どこにもない。2度、3度と一等席のあたりを往復していると、一人の少年が話しかけてきた。子供はもういいや、



「どっちがおれの顔なんだ…」

と最初相手にしなかったが、しきりに「ファスト？セカン？」と尋ねてくる。出発の時刻が近い。「ファースト」と答えてしまった。少年は、こっちだと掲示板を指さす。なんだ、ここに書いてあったのか、アリガトウ、で事は終わらない。「ユアシートナンバー？」「C1279」と答えると、こっちだと少年はかけだす。もういいよという顔をしてもだめである。御丁寧に車両の中まで来てくれ、この席だと手でたたく。ここまで来て、いやあ、親切な少年だと感心するだけ損だ。彼の眼が何を欲求しているかわかっている。私は1ルピーコインを探した。差出すと明るく、「ノー、2ルピー。」さすがだ。大人のインド人だったら値段交渉しているところだが、何故か気分がよかった。「OK。」2ルピー札を渡した。パン（紙たばこのようなもので、噛むと液で赤くなる）を口でもてあそびながら、金を受け取り、握手を求めてきた。「サンキュー」自然に言葉が出た。そいつはまっ赤な口でニカッと笑う。これでいいんだと思った。

日本に帰って、デパートの中で「わーん」という子供の泣き声に振り向かされた。よくある光景だ。何かをねだり、それがかなえられない時、母親に思いつきの復讐を行うのだ。その時、インドの貧しい子供たちを思い出す。彼らは泣かない。泣く前に生きようとする。薄汚れた衣服を着ているが、体から原色を発していた。彼らから強烈な「生」をつきつけられたようだ。「死」を見つめるはずの旅が、「生」を確認する旅になってしまった。考えてみれば至極当然のことである。

3) 海外と私

「日本を離れ夢を抱く」

自然環境研究講座教授 根平 邦人

それがどんな目的のものであろうと、日本を離れ外国の空気を吸うことはその人にとってかけがえのない良い経験となる。日本と異なった外国生活、その土地の食物を食べ、外国の人々と親しく接し、自分の目で異国の風物を見ることによって見聞が大きくひろげる。機上から地球をながめるだけでも心豊かになるものである。地平線のみて地球は確かにまると感じ、あのシベリア大平原に蛇行する大河をみて、地球の息吹きを感じ、感動する。こんなことで人間が大きくなり、大きな夢を抱くようになる。

ここに1冊の本がある。Irving Stoneの著した「The Origin」。750ページもあるこの分厚い本を私は10ヶ月のアメリカ滞在中に毎日コツコツと少しずつ読み続け、帰国するまでに全部読み終えた。小説や伝記の類を英語で読む習慣のない私だったので、このねばりは自分でも驚くほどだった。これも日本に居る時と違って、とくに夜の自由時間が十分にとれて初めてなし得たことだと思う。「The Origin」はダーウィンの伝記とでもいえるもので、この本の中には進化論が生まれた背景、ダーウィンの心境が生々しく描かれている。とくに彼の私生活、優れた教師に恵まれていたこと、ビーグル号でイギリスを離れる前のさまざまなトラブルとダーウィンのいらだちなどが、見事に描写されていて私の心を打った。病弱な身体を鞭打ってのことだけにダーウィンの苦悩がよく伝わってきた。アメリカでこの本を読んでいるうちに、私はダーウィンの足跡を私自身の足で訪ねてみようとの欲望に駆立てられていったのである。

折も折、その年(1981年)の夏、オーストラリアで国際植物学会議が開かれることになっていたの、私は直ぐに出席する気になってしまった。自分の研究発表はそれとして、南半球であのダーウィンの足跡を探るにはこの上ない好機。このことを第一義的に考えた私はこの学会に出席すべく手続きを早々にすませ、エクスカージョンは南極に近いタスマニア島と決めた。

8月中旬、一度広島に帰った私は、あわただしく予定していたオーストラリアに向け、日本を後にした。シドニーでの学会を大過なく終えた私は、勇んでタ

スマニアに飛んだのである。その時のタスマニアの印象を私は次のように記している。

「ついにタスマニアまでやってきた。ダーウィンの足跡がこの島に刻まれているのだ。彼の目で見えた風物を私のこの目で見ることができる。ホバート・タウン、その背後にそびえるウェリントン山。その山が私の眼前にあった。エクスカージョンでは、この山のふもとまで足をのぼすことができたが、頂上までは激しい雨と寒さで到底行きつくことができなかった。ダーウィンの見たであろう植物たち、とりわけキク科の木本類が多く目につく。自由時間にはダーウィンに関する資料を求めべく、主として博物館などを訪ね歩いた。しかし思うような成果が得られず、いささかあせり気味……。」とある。

このように私は外国で読んだ1冊の本がきっかけとなってダーウィン研究を私のライフワークの一環として考えるようになった。それは学問的には決してレベルの高いものとはいえないかも知れない。しかし私はなぜかそう思うようになってしまった。私はダーウィンの生まれ故郷イギリスさえもまだ行ったことはない。あの進化論のふるさとのガラパゴス諸島も南米もアフリカも知らない。彼の足跡を探るといってもその道は遠く険しいが、いつの日にかそれらの地を私のこの足で踏査し、この目で彼の見た山、岩、動・植物、人種を見、風物に接し、進化思想の源を探りたい。それは「ダーウィン進化論のルーツを探る」といったものである。私はダーウィンのように長い年月をかけてのんびりした船旅はできない。飛行機を使つてのモダンな旅としたい。写真やスケッチを添えた豊かな紀行文としたい。そんな夢をふくらませているのである。このことを遂行できるのはいつの日か。授業や会議や雑用に追いまわられている日々が今のように続いているかぎり私のこの夢はただの夢に終わってしまうであろう。実現できなくてもいい。大きな夢を抱くことは大変良いことで、心豊かになる。

この私のロマンに満ちた夢は、ささやかな外国生活の体験から芽ばえた宝だと思っている。

「異文化の文法コードを求めて」

異文化を理解するには、どのような接近方法が考えられるのであろうか。総合科学部で人文地理学、イギリス地域研究、地域学を講じてきた筆者の胸には、いつもこのような問題が去来し、脳裏を離れることがなかった。“憑かれた”とはこのような状態であろうと、自分を他人にみだてて、つきはなしてみることもある。しかしどう考えても思案に余るところが現在の心境である。しかし手を拱いているだけでは能がない。そこで、国内の地域調査や、南インドの地理学的調査によって得られた知見をもとに、異文化の文法を理解する手だてを、ここでもう一度吟味することによって、問題の本質に迫ってみることにしたい。

和辻哲郎は、『風土』の中で、風土の人間学的考察を展開している。その一つの重要な論点は、特定の風土のなかにおける自己了解、従って自文化(own culture)の理解は、その風土へ自ら超出することによって行われる、ということにある。「存在」(existence)とは、ex-sistere、すなわち、自己から超出することであることから容易に理解できる。この系論をさらにつき進めるならば、異文化(other culture)の理解を通じて、自文化を了解することができるであろう。このような認識座標は自己中心とする自文化と異文化の間にはりめぐらされた緊密な認識のネットワークの上に設定されている、という意味で、知の三角測量にも比せられよう。風土の3類型というかの有名なテーゼはかくして提起された。和辻は、フランスの人文地理学者 Vidal de la Blache、歴史学者 Lecien Lefavreらの研究成果を大幅に摂取することによって、ハイデッガーの「有と時間」において展開された、一元的な人間存在の理解の地平を超克しようと試みた。これは人間存在を時間軸と同時に空間軸にそって理解すること、否、この二つの軸を交叉させることによって得られる象限に、人間存在の究極の基盤をみいだそうとする試みにはかならない。従って、ここでは自己了解の型は風土の類型によって規定されてくることになる。存在の認識に空間軸を導入したことによって、オントロジーの地平は大きく変わった。しかし、その論証のしかたが、①直観的であること、②風土類型の設定が、グローバルなレベルでみても粗大で

英米研究講座助教授 米田 巖

あり、地域の実態に即していないこと、③そして、環境と人間の交互作用をめぐって提起された、いわゆる『決定論』と『可能論』、そのいずれの視点に立脚するにせよ、和辻の風土論は、地域理論を充分踏まえていないという点で、なお考慮すべき点が少なくない。

内村鑑三は『地人論』において、「地を離るれば人なし、人を離るれば事なし、故に事を成さんと欲する者はまさに地理を究むべし。」と説いた吉田松蔭のことばを引用して、地理学研究的必要性を強調している。これを、事のまえに人、人のまえに地を考察すべきであると解釈しては元も子もない。松蔭は、事一物一人一地という累層的な有機性に着目してそれらを個々に切り離さず、三位一体として把握するためには、大地に刻みこまれた歴史的な心性を景観を手懸りとして解説していくことがいかに重要であるかを強調しているのである。そこに浮かび上がってくるのは、生活様式という文化の文様である。人間が柄で自然が地といってもよい。その柄に一定の規則性なり方向を与えるものが文化のみえざる文法コードということになる。コードをコードそれ自体として、文化のコンテクストから切断して取り上げて、研究対象とするならば、そのコードを育て哺んできた文化そのものをも切り捨てることになる。もとより精神文化は物質文化と密接不可分の関係にある。可視的な物質文化(景観、生活様式)からより高次の精神文化を逆照射することによって、思弁的な文化解釈の弊害を少しでも除去し、真の異文化理解への道を模索しようとする学派が陸続として生まれてきた背景には、科学研究の細分化と知的閉塞状況があったことも否めない事実であろう。

異文化理解への模索とは、おおむね次のように要約できる。

- 1) 人類は文化という外皮を着ている。あるいははその枠組みの中にとじこめられ、特定の刻印をうけている。
- 2) しかし、自文化の中にいながら、同時に自文化を超えた世界に触れ、その文化のコードを解読し、それをもとに可能ならば、相異なる複数の文化体系を同時に生きることによって、中華思想を超克しようという蓋然性。

3) かくして、異文化の理解とは、おのずから自文化を含めた比較文化の作業にならざるを得ないということ。

4) このような地平にたつとき、われわれは有限の生を過去と未来に向かって投企することが可能となる。そして、それと同時に共時的には、自己の有限の生を、他地域の異文化体系に属する人々との生活世界という異なった次元へ転移 (translate) させることができる。このような比較文化の作業は、異時間と空間に向かう人生の旅にはかならないこと。「天地は万物の逆旅」とは、まさにこのことを集約的に表現したものである。

4) 目で見える“世界にはばたけ”

編集 部

○世界にはばたく総科教官?

まず1図を見てください。これは総合科学部が創設された昭和49年以来約10年間における、総合科学部教官の海外渡航先の分布図です。時々『飛翔』の終わりの方に「学部記録」という記事があるのを知っていましたか? (ちゃんと知っている、というあなたはもう「飛翔」の“通”です!) この中に教官の出張、研修等の海外渡航についての記録があるのですが、今回、特集の一つとしてこの記録を集計してみました。かなりにぎやかな地図ですが、まずわかるのは本当に世界のいろんな国へ総合科学部の教官が渡航しているということです。“世界にはばたく総科教官”といったところでしょうか。また、人数に着目するとアメリカ合衆国が85名と他国より圧倒的に多いのがわかると思います。これは国際的な学会やシンポジウムがアメリカ合衆国で行われることが多いからだと思われます。

○世界にはばたく総科生?

2図は総合科学部における留学生の出入りを表したものです。これも総合科学部創設以来10年間の累積(外国人留学生の分布図は昭和59年度も含む。)の人数です。

これをみると、総合科学部へ来た外国人留学生は、総合科学部ができてから現在までに、世界のいろいろなところから集まっていることがわかります。今年度を含めると総合科学部へ来た留学生は46人で、その内訳は大学院生が10名、研究生が36名で、学部生は0となっています。広島大学全体では現在32ヶ国169名の留学生が在学しています(昭和59年6月

人文地理学や文化人類学などの領域では、フィールド・ワークによって異文化のコードを解読することが一つの定石となっている。

ある文化は、大地に深く刻み込まれてくると、しだいに多様な柄が截然と識別できるようになる。そしてその地域独自の文化景観として結晶化してくるようになる。われわれは、まずこれを一つの有力な手懸りとして、異文化を解読するわけである。大地という開かれたテキストに即して異文化を理解していくことは、そのいみで比較文化の実証的研究をおし進めていくうえで最も有効なアプローチの一つであろう。

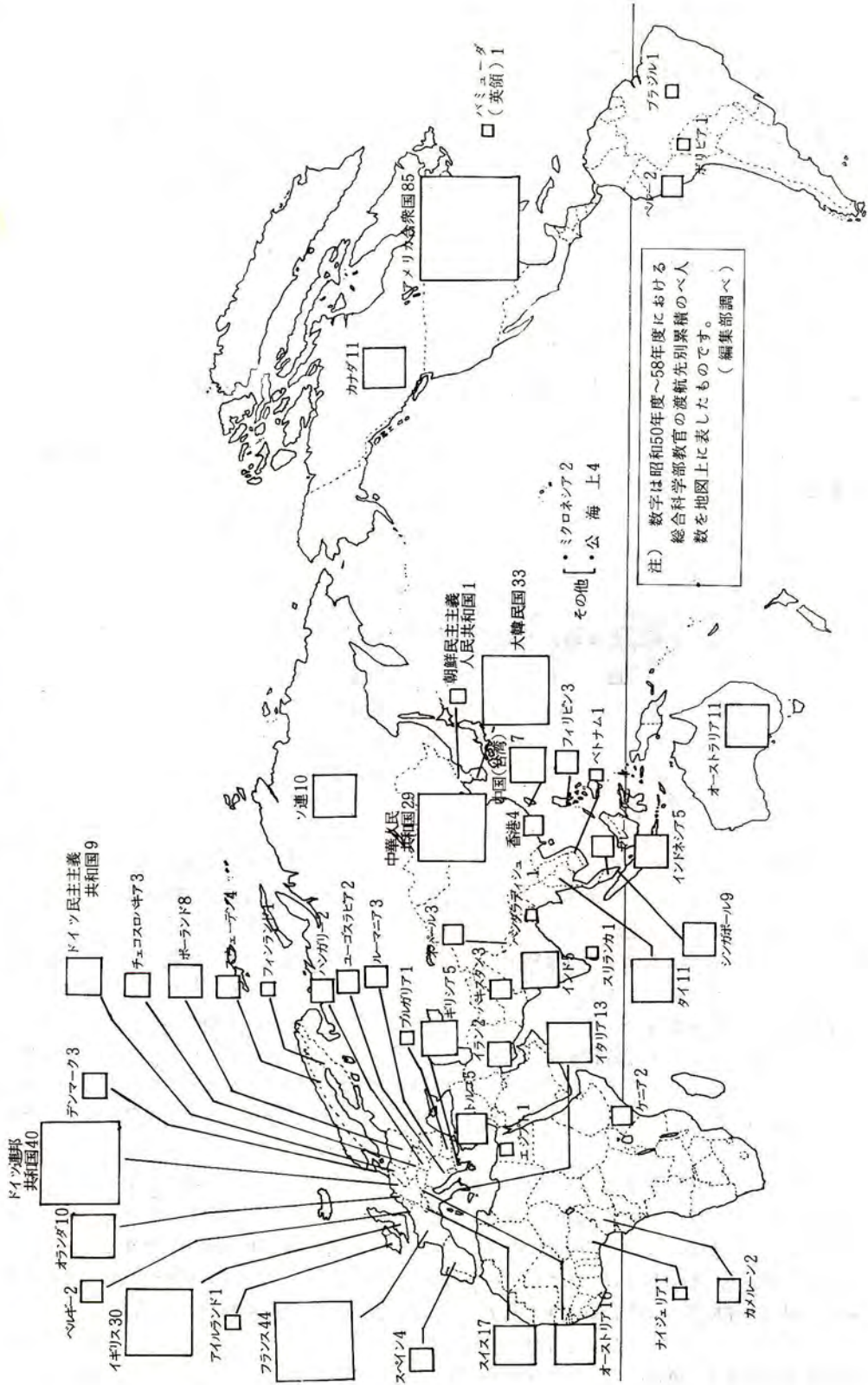
1日現在)。

また日本からは7名海外へ留学していったことを示しています。ちなみに、広島大学からの留学生として学部別にみると、同期間(昭和49年度~58年度)の海外留学生は文学部24人(うち院生13人)、教育学部が22人(うち院生7人)と多く、総合科学部の7人(うち院生3名)がこれに次いでいます。広島大学全体からみた留学先はやはりアメリカ合衆国が多く26名、次いでイギリス15名、フランス8名、カナダ8名、西ドイツ7名…となっていて、総合科学部からの留学生の留学先もだいたい同じ傾向にあるといえます。ただこれらの資料は学生部や総合科学部の学務係などの記録によるものであるため、この留学生は文部省による国費留学生に限られています。しかし、実際にはいろいろな財団の援助による留学や自費による留学など、いわゆる私費留学もかなりあるようですが、これらの正確な記録が見あたらないため、その実態をつかむことができませんでした。ですから、国費・私費を含めた、海外留学生の数や国は2図に示したものよりもきっと多いはずです。

以上、簡単に二つの世界地図の解説をしました。まあそれはともかくとして、この記事をお読みになったみなさん、海外留学を志す人も、留学は考えてないが学生のうちに絶対海外旅行へ行くんだ、とお考えの人も、留学も海外旅行もゆめゆめ思ひはべらじ、とおっしゃるあなたも一度世界地図を拡げて異国に思いを馳せてみてはいかがですか?

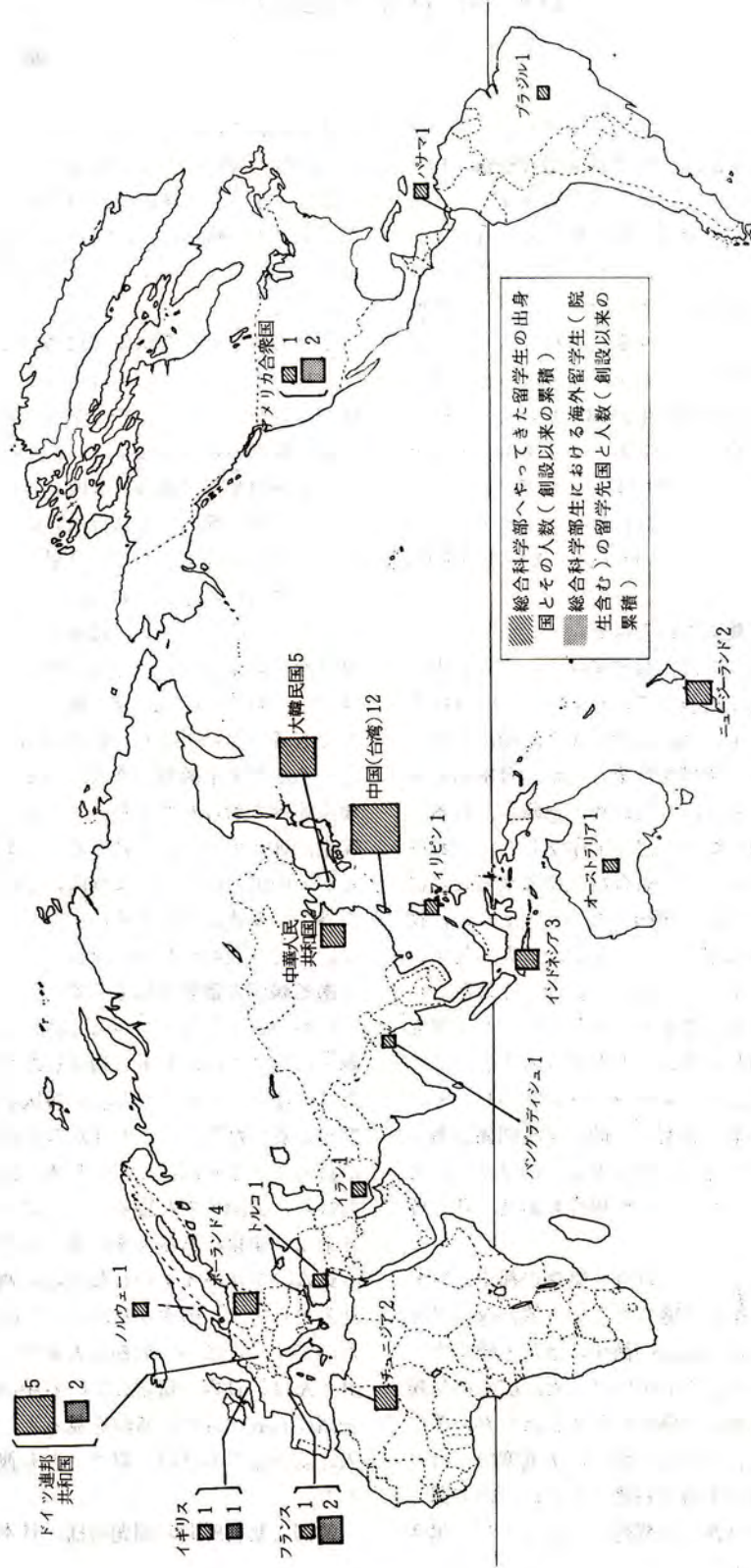
(文責 海堀 修)

1 図 総合科学部教官の海外渡航先



注) 数字は昭和50年度～58年度における総合科学部教官の渡航先別累積のべ人数を地図上に表したものです。(編集部調べ)

2 図 総合科学部における留学生の出入り — 昭和49年度（総合科学部創設）～昭和58年度 —



5) 留学生に会って

編 集 部

・はじめに

私達『飛翔』編集部は、総合科学部で勉強されている留学生の方々にスポットを当ててみました。企画としては、留学生の方に一堂に集まってもらい、座談会を催す予定でしたが、こちらの不手際や、各人の時間の都合もあり、中国及びチュニジアの女性2人を含む、主に日本研究を専攻されている7人の方に、個々に話を聞かせてもらう形になりました。現在、総合科学部には留学生が13人おられ、院生8人、研究生5人を受け入れており、学部生は皆無です。国別では、韓国3人、中国2人、台湾2人、ニュージーランド2人、フィリピン、インドネシア、チュニジア、西ドイツ各1人という内訳(84年6月現在)です。

・留学の動機や広島についてなど

留学の動機については、日本研究という専攻上、やはり実際に現地で勉強してみたかったということでした。留学生の中には、台湾のAさんのように、自国の大学の日本語学科を卒業したが、日本語が生かせるような職場でなかったために退職し、日本についてもっと勉強したいと思って留学した、いわゆる脱サラの方もいました。総合科学部に来ることになった理由については、韓国のBさんのように、初め日本のある大学に留学していたが、広大の先生の紹介でここに移ったというケース、同じく韓国のCさんのように、日本文学をやるにしても、この学部ではいろんな方面から学ぶことができるとしてここを選んだという方、ニュージーランドのDさんのように、自国の大学と広大との間に交流関係があったのでという方、チュニジアのEさんのように、文部省の振り分けによるといった場合もあり、各人各様でした。

広島の影響を聞くと、やはり「原爆の都市」であり、原爆の悲惨さを肌で感じたという答が返ってきました。その他では、広島の街中には川と橋が大変多いということがあげられていました。広島の気候に関しては、出身地との関係からでしょうが、蒸し暑く住みにくいと言う人もいれば、大変寒いと言う人もいました。日常生活で戸惑った点について聞くと、「銭湯」という答が結構返ってきました。男性

はすぐに銭湯に慣れるようですが、女性の中には、まだ一度も体験したことのない人もいれば、中国のFさんのように「最初はとても恥ずかしかったのですが、今ではお風呂につきりながら、風呂文化についておばあさんと話をするようにまでなりました」という人もいました。

・広大の学生や総合科学部について

次に、広大の学生や総合科学部について具体的に聞いてみたのですが、この学部を選んで来た人の中には、韓国のCさんのように、実際に留学してみると「総合科学部の試みは失敗だった」という噂があるのに非常に驚いたと言う人もいました。このCさんは「総合科学部をもっと発展させなければならぬ」と熱っぽく語っておられました。学生に関しては、クラブ活動に熱心、授業中よく居眠りする、一見真面目であるなどの意見が出ました。ニュージーランドのDさんは「私達の国の場合と比べて、とにかく若者しかいません。私達の国では、学生はもっといろんな(年齢層の)人がいました」と学内の印象を述べておられました。さらに、留学生の方々が院生、研究生であるということもあるかもしれませんが、中国のGさんのように、学生とはクラブ活動以外では友達になりにくい。もっと学生の友達がほしいと言う人もかなりいました。

・ある韓国人留学生に会って

比較的長い時間にわたって話を聞くことのできた韓国のBさんは、日本へ留学した当初の体験を次のように語ってくれました。「韓国から飛行機で成田空港に着いた時には、わずかな手荷物と毛布一枚しか持っていませんでした。日本に知人がいるわけでもなし、公園にでも寝るつもりでしたよ。広大に来る前は、東京のある大学に通っていたのですが、住み込みのアルバイトをしながらの通学でした。住み込みでない、勝手がわからず生活してゆけなかったのです。とにかく最初は大変でした」と。また、Bさんは「日本へ留学している中国と台湾の人が、一語にしゃべっているのを見ると、私達も北朝鮮の人と話がしてみたいと思う」とも洩らされていました。

韓国と北朝鮮間の問題同様、日本と韓国間の問題

にも深刻なものがあるようです。今年になって、日本では韓国を紹介する本が相次いで出版されましたが、まだ「近くて遠い国」の域から脱していないように思われます。日韓の歴史上初めての韓国国家元首の公式訪問である、全斗煥大統領の訪日に際し、日本側の「日韓文化交流委員会」の設置構想を、韓国側が時期尚早と拒否したといった新聞記事を読んで、韓国には植民地時代の傷跡が、今なお癒えずに残されていることに初めて気付いた人も多かったのではないのでしょうか。この『飛翔』が出される頃には、すでに大統領の訪日は済んでいるはずですが、この訪日は今後の日韓関係の上にどのような変化をもたらすのでしょうか。

両国の若者における体験の違いを聞いてみると、Bさんはその一つとして、兵役義務の有無をあげておられました。韓国では、兵役義務期間が20歳から3年間あり、挨拶、言葉遣いをはじめとする多くの規律や厳しい訓練が課されるそうです。現在、日本には兵役義務制度は無いのですが、因に兵役義務制度がある国を並べてみますと、韓国、北朝鮮、台湾、中国、ソ連、スカンディナビア諸国、西ドイツ、スイスなどをはじめ意外と多いことがわかります。兵役義務の有無と青年層の意識の違いを調べたら、何かおもしろい比較ができそうです。

Bさんは最後に「韓国では日本を客観的に見つめ直そうとする若者が増えつつあります。日本でも韓国を客観的に見ようとする若者が増えなければ、(両国間の)真の交流は図れないと思います」と述べておられました。このことは日韓関係上に限らず、どの国との関係においても言えることでしょう。

・最後に

今回は、総合科学部におられる留学生の約3分の2の人にしか接することはできませんでしたが、ほとんどの人が、もっと日本の学生と交流の場を持ちたいという意見を出しておられました。たとえば、その方法として、地域研究や現代社会研究といったたぐいの授業に、1回でも留学生と話し合える機会を作るといったことは可能であり、私達日本人学生及び留学生の双方にとって有益な事のように思えるのですが、どうでしょうか。

最近では、反戦・反核運動などでも「草の根レベルで」という言葉をよく耳にしますが、それぞれの国の次代を担うであろう世代、留学生と学生の対話という民間レベルの交流は、まさしく国際交流の「草の根」であり、国際理解につながるものでしょう。

私達の質問に、貴重な時間をさいて、流暢な日本語で答えて下さった留学生の方々、有難うございました。

(文責・古川 哲史)

斬気淳二の飛翔批評話 ①

(ヒシヨヒシヨバナシ)



6) 『飛翔』 留学講座

国費留学の手引き

編 集 部

留学してみたい!!こんな思いに駆られたことがある人はたくさんいるはず。そんな人に聞いてみたい。
Do you know 学生国際交流制度?

このコーナーでは学生国際交流制度が一体どんな制度で、どんな手続きをすれば留学できるのかをお教えます。

まず、学生国際交流制度とはどんな制度か説明せねばならないでしょう。この制度は昭和47年に発足し、国立・公立・私立大学の学部学生、修士課程の学生を対象として文部省が奨学金を支給するという制度です。この制度の狙いは留学体験を通して、国際的な視野と国際的感覚を持った人を育成し、あわせて外国大学との教育交流、学生交換を促進することにあります。まさに、総合科学部の理念にぴったりという感じがするのですが、いかがでしょうか。この他にも教員養成学部海外派遣制度というのがありますが、残念ながら総科の学生は転部しない限り無理。それに忘れてはならないことは、学生国際交流制度を利用できるのが、3年次生以上となっていることです。3年になってから留年して留学なんかしてたまるかとおっしゃる方。大丈夫。この制度に休学しなさいという項目はありません。向こうの大学で取得した単位を広島大学の単位として認めてく

れるので、休学せずにすむのです。ただし、向こうの大学で単位がうまく取れればの話ですが……。しかし、今まで留学するときは休学せねばならなかったのに対して、この制度を利用するなら存学留学できるのです。これは実に有意義なことだと思います。在学留学できることがこの制度の大きな特色なのです。

それではどうすればこの制度を利用して留学を勝ち取ることができるのか。これははっきり言って難しい。つまり、この制度を利用するにはかなりの実力と努力が必要だということです。次からは、特に多い英語圏（主にアメリカ合衆国）に留学したいと思っている学生を例にとって、ドキュメンタリータッチでその手続きを紹介し、留学までの過程を追ってみたいと思います。

留学までの長い道のり（総科生編）

世界にはばたけ総科生。この言葉を胸に彼は学生国際制度の難関に挑む決心をした。まず、学部の推薦を受けるため、学務係へ申し込む。やはり、問題となるのは11～12月頃にある学内選考だ。おそらく、一番の難関になるのはこの学内選考だろう。この学内選考で選考の基準となるのは、TOEFL (Test of English as a Foreign Language) の点数。これは筆記

表1 派遣先大学の選定について

○学生国際交流制度……原則として下記の大学によるものとする。

地 区	国 名	大 学 名	学生国際交流制度 推 薦 人 数	備 考
北 米	ア メ リ カ	ミシガン大学	3人以下	
ヨーロッパ	イ ギ リ ス	ロンドン大学	2人以下	学生国際交流委員会決定 (S.53. 2. 7)
	フ ラ ンス	パリ第4大学	2人以下	
	ド イ ツ	チュービンゲン大学	2人以下	
オセアニア	ニュージーランド	オークランド大学	2人以下	
ア ジ ア	イ ン ド	バナラスヒンズー大学	2人以下	
北 米	カ ナ ダ	ブリティッシュ コロンビア大学	2人以下	学生国際交流委員会決定 (S.53. 7. 4)
ヨーロッパ	イ ギ リ ス	オックスフォード大学	3人以下	学生国際交流委員会決定 (S.58. 6. 28)

○教員養成大学・学部学生海外派遣制度……派遣先大学については特に限定しない。

試験とみなすらしい。12月頃に行う英会話の試験。外人教師を含む面接形式で行なうらしい。専門分野の留学計画。これは自分の担当教官と相談して決める。最後に日常の学業成績。どうも最後の学業成績というのが不気味だと彼は思った。それに、もちろんのことながら、英語の実力も人並み以上でないといけないだろう。そうでないともし選考に通っても、向こうの大学へ行ってから授業についていけないことになる。まずは英語の能力を向上させねばならない。



彼の努力の結果、この話は続くことになった。次は文部省選考である。学内選考に通ったとしても、文部省選考をパスできるとは限らないらしい。文部省も国が費用を負担するのだから、それなりの学生を派遣したいと思うのは当然のことであろう。この選考は2段階に分かれている。第1段階では、各大学から提出された留学計画を審査する。そして、第2段階でその留学計画に見合った学生を決定するのである。この選考にすべてがかかっていると言えよう。最終決定は6月頃。もうここまで来たら落ちるわけにはいかない。世界にはばたく総科生になるためにも、最後まで話を続かせるためにも。

今までに総科からは7人、この制度の利用者を出している。その7人の内訳はアメリカ、フランス、ドイツが各2名、イギリスが1名である。うち4人が学部生、3人が院生だった。(昭和58年度現在)彼はついに8人めの利用者となった。彼の場合、アメリカへ留学を希望していたので、この制度によるとミシガン大学へ留学することになる。その他の国の選定大学は表に書いてある通りである。ただし、成績面で大学の方から断ってくることもあるそうだ。大学への派遣は向こうの新学年が始まる9月である。奨学金と往復の旅費(最寄りの国際空港から外国まで)が支給される。数々の難関を乗り越えて、つい

に留学へのキップを勝ち取った彼がアメリカの大地を踏む日は近い。

今の話はあくまでも想像上のものです。しかし、学生国際交流制度の内容及びそれを利用するための過程はわかってもらえたと思います。現在、身近にこの制度を利用した人が見当たらないため、あまり詳しく紹介できなかったのが残念です。この文章を書いている私自身もこの制度を利用したいと思っている一人です。こんなに立派な制度があるのだから、利用しない手はないでしょう。もし、この制度に関心を持たれて、もっと知りたいと思われた方は総科の学務係に聞きに行ってもらえばいいと思います。

留学は金と時間の問題をいつも抱えているようです。しかし、大学生だからこそ、これらの問題を破れるチャンスを持っているのです。世界にはばたく総科生の名は健在だということを示すにはこの困難を打ち破って、国際人としての自覚を得ることが必要なのです。異国の環境や人々に触れ、自分を国際人として育てていくのが総科生のふさわしい姿ではないでしょうか。総科生は世界へ飛翔せねば……と学生国際交流制度のパンフレットを握りしめ、そうつぶやく今日この頃。あまり力んでもしかたないけれど、留学するための努力は決して無駄にはならないと確信しています。

(文責・野田 啓三)

